

多様性に拓かれたミュージアムを 考える教材の制作と実践

Developing and Practicing an Educational Program
on Museums and Diversity

宮田雅子・村田麻里子

MIYATA Masako, MURATA Mariko

キーワード：ミュージアム、多様性、ワークショップ

1. はじめに

本稿は、ミュージアム¹における文化的多様性に向けた取り組みについて考えるために制作した教材²を紹介しつつ、実際に教材を活用した3つの大学での授業実践³について報告するものである。教材の開発にあたっては、日本国内のミュージアムにおける多様性（ダイバーシティ）の推進とは何を意味するのかを、具体的な事例や実践に基づいて考えられるツールを目指した。

欧米圏のミュージアムでは、多様性の推進とは、白人、異性愛者、健常者以外の人々に対して開かれていること、すなわち、多様な人種、エスニシティ、ジェンダー、セクシャリティ等の人々を包摂することを意味する。具体的には、多様な来館者層が訪れて楽しめること、館内のスタッフの属性が多様であること（特に、白人に偏らないこと）、またコレクションや展示が多様な人々や文化を表象していること、あるいは彼らに配慮したものになっていることなどを目標に取り組んでおり、近年ではダイバーシティ・マネージャーなどと称して推進のための職位が置かれることもある。

日本でも、東京2020オリンピック・パラリンピックの開催決定前後から、多様性という言葉は頻繁に聞かれるようになった。しかし、日本社会における多様性の在り方は、欧米圏のそれとは事情や状況が大きく異なるため、上記のような取り組みは、国内のほとんどのミュージアムにとっては他人事聞こえてしまう。日本の土地柄や状況を踏まえた多様性の在り方や対応をより現実的に検討しなければ、多様性に拓かれたミュージアムを目指すことはできない。そうした状況を踏まえ、この教材は、日本のミュージアムにおける多様性とは何を意味するのかを考えると同時に、それぞれのミュージアムが、多様性に対してどのような意識・認識を

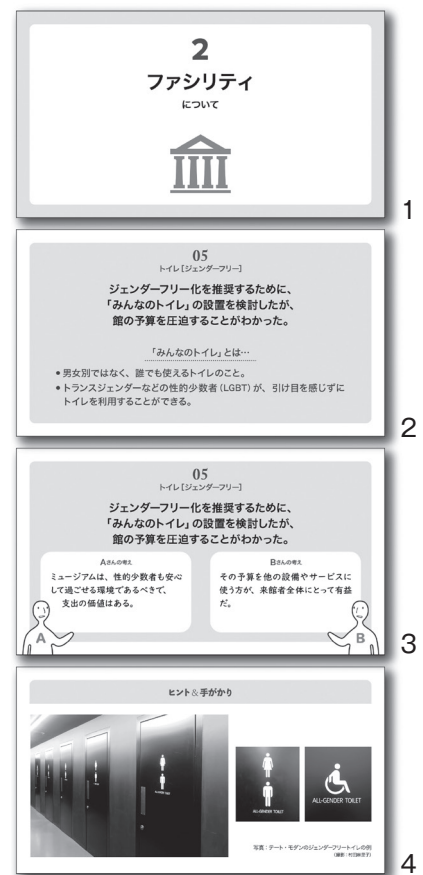
持っているのかが具体的に見えてくるようなプログラムになることを心がけた。

この研究⁴のそもそもの目的は、各ミュージアムがどのように多様性（の推進）という今日的な課題に取り組んでいるのかを、ミュージアムの組織、運用、ファシリティなど複数の側面から総合的に考えられる手立てを模索することであった。しかし、各館を画一的な多様性の指標をもとに評価や査定をしても意味がなく、むしろ、それぞれの館が多様性の課題に取り組むことの意味や方法を考えられるツールにしたいと考えた。そこで、ワークショップ型の教材を制作し、ミュージアム関係者や、ミュージアムについて学ぶ学生が、それぞれ自主的に考えられる仕掛けとした。

2. 教材の概要とワークショップの手順

本教材では、ミュージアムが多様性について考えたり、その推進に取り組む際に起こり得る問題を想定し、4つの分野に分けた18の項目を設けている。「運用（項目01～04）」「ファシリティ（項目05～08）」「ビジュアル・コミュニケーション（項目09～11）」「展示（項目12～18）」の順に並んでいるが、参加者の興味や専門性、授業の進捗状況などに合わせてどの項目から始めても良い。

スライド1～4は、ワークショップでファシリテーターが使用する提示資料の一例である。各項目では、まずミュージアムで起こり得る典型的な状況が課題として提示され（スライド2）、次にそれに対する「Aさんの考え」「Bさんの考え」が紹介される（スライド3）。AとBの意見は対立する内容になっているが、どちらの言い分にも一理あるため、容易にどちらかに賛成することは難しくなるように作られている。参加者はAとBの意見を参考に議論を進めるが、そのうえで折衷案やまったく異なる第三の意見に辿り着いても良い。むしろ、AとBの考えを参照しながら議論を進めることで、参加者が各自の視野を広げ、考えを深めていくことがこのワークショップの目的である。スライド4は、課題へのヒントや手がかりを示すもので、実際のミュージアムでの取り組みや事例に基づいてファシリテーターが解説する際に使用する。ワークショップの時間配分やスライドを見せるタイミングはファシリテーターに委ねられているが、本稿の「4. 実践の様子」で具体的な進め方も紹介する。



スライド1～4：
ワークショップのために制作した
教材の画面の一部

3. 各項目の内容とねらい

以下に18項目の詳細を述べる。それぞれの項目で紹介されている参加者の反応やコメントは、4回の授業実践（詳細は「4.」を参照）に参加した大学生たちのものである⁵。

3.1 運用（項目01～04）

01. [監視スタッフ]

来館者が咳をしはじめ、慌てて展示室内で水を飲んだら治まった。マニュアルには、飲食禁止だから注意するようにと書かれている。

Aさんの考え（以下、Aと略す）：監視員に注意されると、ミュージアムの体験が台無しになるので、注意しない。

Bさんの考え（以下、Bと略す）：2回目を防ぐために、マニュアル通り注意する。

ミュージアムの特徴のひとつに、禁止事項や注意事項が多い点があげられる。館内には多くの禁止サイン等が貼られ（写真1）、監視員がフロアに常駐している。項目01は、作品保護のための基本ルールを運用することの意味について考えるものである。そもそも禁止することで何が守られるのか、逆に禁止されることで何が失われるのか、例外を認めるとどんな問題が起こるのかを、注意される来館者の気分や注意する監視員の論理から考える。



写真1：ミュージアム内の禁止サインの例（横須賀美術館、神奈川県）

ワークショップに参加した学生からは「注意されるとミュージアムの体験が台無しになるので声をかけない」「なぜ飲食禁止なのか理由を考えると、このケースは当てはまらないので注意しない」という意見も出たが、「注意はするが、言い方を工夫する」「状況による。絵画等の近くなら注意する」「次の展示室でも起きるかもしれないので、『次回からは』と説明しながら注意する」等、マニュアルに沿いつつも、萎縮させない形で何かしらの声かけをするという意見が多かった。

02. [展示室での騒音]

多動症児童を含む学校団体の見学を受け入れたら、他の来館者から苦情が来た。

A：静かに展示をみたい人の利益を尊重し、児童を別室に連れて行くよう引率者をお願いします。

B：多様な来館者の利益を尊重すべく、来館者側に理解を求める。

注意欠如および多動性障害（ADHD）は発達障害のひとつで、子供だけでなく大人にも見られる。注意を持続できず衝動性が高いことで、ミュージアムでのルールや常識を守ることが難しいなど、周囲の来館者とトラブルになることもある。この項目では、多動症の来館者（児

童)と他の来館者双方の展示物を見たいという希望を両立させることが難しく、AとBのどちらかを尊重すればどちらかが我慢しなければならなくなる。ここでの主旨は、「どちらが我慢すべきか」を考えることでなく、対立する状況をいかに乗り越えるかにある。

学生からは、「利用者に謝罪する」「事前に来館者にアナウンスする」など苦情を言った側への対応を考える意見、「学校の先生に注意してもらう」「先生に見守ってもらう」など学校側に委ね、館の直接的な介入を回避する意見、「学芸員同士で連携し、児童をさりげなく見ておく」「ボランティアに多動症の子供に張り付けてもらう」「体験コーナーや騒げるスペースを設ける」など児童への対応を考える意見など、異なる方向のコメントが出た。団体貸し切りにするなど、日にちや時間帯を分ける案も多く出されたが、その際には、来館者を分けること自体に問題がないかもこちらから問いかけた。その他にも、児童のことを来館者に説明するのはプライバシーの点から問題ではないかという意見や、博物館の公共性に対する館の考えを説明して理解を求めるべきといった意見が出された。

03. [運営ルール]

年齢制限のあるコーナーに対象外の人が入りたいと言ってきた。中は空いている時間帯だった。

A：入れる状況なのだから、入ってもらおう。(一概に年齢で区切るのは、年齢差別にあたらないだろうか。)

B：一人でも例外をつくと、ルールが有名無実化する。

この項目では、展示の年齢制限を行う理由を考える。一律に禁止や制限を設けることはミュージアムの運営のしやすさにつながり、トラブルを回避できる一方で、融通の利かない硬直した運用になる危険もある。ここでは、子供向けのコーナーがある理由は何か、そこに大人が入るとどのような問題が起こり得るか、逆に大人が入れないことで起こる問題はあるか、と具体的に想像しながら検討していく。



写真2：3～5歳の子供限定の展示室の例
(シテ科学産業博物館、パリ)

学生の意見では、「年齢制限がある理由を説明する」「今回に限りという条件つきで認める」「空いているなら入れる。ただし、子供が来たら出してもらう」「禁止されるとかえって気になるので、写真を見せるか、入口から覗いてもらう」「博物館は公衆に開かれた空間なので誰でも利用できるべき」など、できるだけ柔軟に対応する意見が多かった。一方で、「年齢制限にはそれなりの理由があると思う」「一度例外をつくと、あとの対応が大変になる」「不審者だったら困る」「安全面が理由なら、何かあったときに学芸員にも大きな責任が伴う」「ルールを変えるならルールをつくる意味がない」「一度特別扱いをして、次に来館した時対応が異なるとよくない」といった意見も少なくなかった。A・Bどちらに近いかわからず、多様な

理由や根拠が提示された。中には、「児童の発達には個人差が大きいので、杓子定規な年齢制限には意味がない」と、ルールそのものに疑問を呈した学生もいた。

04. [障害者への対応]

全盲の視覚障害者が予約なしで一人で来館した。

A：急には対応できない。事前に連絡をもらえれば対応できるので、日を改めてきてほしい。

B：視覚障害者への対応の用意はしていないが、せっかく来てくれたので、できる範囲で対応したい。

視覚障害者はミュージアムにとってもっとも遠い存在である。近年、視覚障害者を対象としたワークショップなどが積極的に企画されるようになった⁶が、その一方で、晴眼者のように一人でふらりと来館して展示をまわることが想定されていない。たとえば写真3のような、点字と触図を使った館内案内や展示物の解説があっても、全盲の視覚障害者にとってはそもそもそれがどこにあるかを探すことは困難である。その一方で館のスタッフがつきっきりで対応することは、出勤人数や予算の関係から難しい場合がほとんどである。また、展示に関する専門知識や、視覚障害者への対応への知識も必要になってくる。

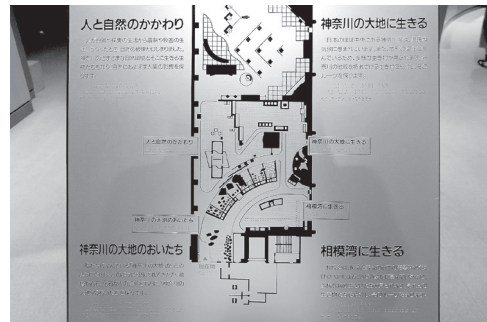


写真3：点字と触図を使った館内案内の例
（神奈川県立 生命の星・地球博物館）

この項目は、こうした点について考えるためのものだが、視覚障害者と接触したことのないほとんどの学生にとっては状況が想像しづらく、「できるだけ対応するが、予約してほしい旨を伝える」という無難な回答がほとんどだった。そのため実践では、視覚障害者と共に美術鑑賞を行うイベントや、健常者がアイマスクをした状態で彫刻作品を触察する取り組みなどを紹介することで、イメージがより膨らむように努めた。

3.2 ファシリティ（項目05～08）

05. トイレ [ジェンダーフリー]

ジェンダーフリー化を推奨するために、「みんなのトイレ」の設置を検討したが、館の予算を圧迫することがわかった。

A：ミュージアムは、性的少数者も安心して過ごせる環境であるべきで、支出の価値はある。

B：その予算を他の設備やサービスに使う方が、来館者全体にとって有益だ。

「みんなのトイレ」とは…

- ・男女別ではなく、誰でも使えるトイレのこと。
- ・トランスジェンダーなどの性的少数者（LGBTQ）が、引け目を感じずにトイレを利用することができる。

公共施設のトイレのジェンダーフリー化に向けた取り組みは、近年、欧米のみならず日本でも進められている。こうした取り組みには、性的少数者が人目を気にしながら男子トイレ／女子トイレのどちらかを選ばなければならない苦痛を解消できるメリットがある。しかし日本では、「ジェンダーフリートイレ」という言葉はあまり使われておらず、「みんなのトイレ」や「多目的トイレ」という名称が一般的である。これらは必ずしも性的少数者に限定したのではなく、どちらかといえば障害者や介護者、子供のオムツ替えをしたい親などが想定される場合が多い。そのため、課題にある「みんなのトイレ」という言葉を使うと、「性的少数者以外でも使うことができ、他の人にもメリットがあるため、設置しても良い」「ジェンダーにかかわらず、誰にでも使えるトイレは必要」といった回答がほとんどを占め、ジェンダーについて考える課題になりにくい。ジェンダーの多様性に焦点化して議論をしてもらうには、ジェンダーやセクシュアリティに関する基礎知識について、補足を要する。我々は4回の授業実践を通して両方のパターンを試したが、どちらも一長一短があるため、状況に応じてコーディネーターが枠組みを決める必要がある。

「ジェンダーフリートイレ」に絞った議論では、「男女共有は、双方ともに生理的に抵抗感がある」「性犯罪などにはつながらないのか」「トイレを使う人は少数なので、他の設備やサービスを優先すべき」「ジェンダーフリーは館内で賛同が得られなさそうなので多目的トイレとして設置すべき」といった消極派も多くいた一方で、「ミュージアムは教育施設で、LGBTQの問題は今後も私たちは向き合わなくてはいけない」「ゼロからプラスより、マイナスからゼロの方が価値があるから支出すべき」といった、ミュージアムの社会的位置を意識した推進派の意見も多数出た。またディスカッションの後に、「私は性的少数者だけに配慮して意見を述べたが、それによって今度は男女別を望む人を無視していたことに気がついた」という学生もいた。さらに、予算を圧迫するということに対して、クラウドファンディングや、補助金の申請などのアイデアを出したグループもあった。

06. 館内 [ベビーカー]

館内でのベビーカーが邪魔だと苦情が来た。

A：親子の来館を歓迎するために、このまま許可したい。

B：ベビーカーは通路を遮り、一般来館者の妨げになるため、館内では／展示室内では許可すべきではない。

近年、公共空間におけるベビーカーのあり方がしばしば議論になる。ミュージアムでも子供連れの来館者向けにベビーカーを置くスペースを設ける館が増えているが、展示室内での利用は限定的である（写真4）。この項目は「02. [展示室での騒音]」と同様に、ある利便性を採り入れると他方にとっては不便になる場合もあることを主題にしている。しかし実践では、ほとんどの学生が共存は難しいと考え、「ベビーカーの日を設ける」といった解決策を提案して

おり、公共施設としてのミュージアムの立場に立って考えるのは難しいようだった。中には「抱っこひもを貸し出す」「ベビーカーと歩行者の通り道を分ける」等のアイデアも出す学生もいた。



写真4：展示室前のベビーカー置き場の例
（横須賀美術館、神奈川県）

07. 通路 [スロープ]

バリアフリーを推奨するために、館内をすべてスロープで移動できるように改修する案が出た。

A：車椅子の人がエレベーターを探さなくても館内を回遊できるようになるのでよい。

B：スロープは、麻痺がある人や松葉杖を使用している人にとっては歩きにくいので多用すべきではない。

この項目では、多彩な障害がある来館者に配慮したくても利害が対立する場合について考える。しかし、この出題の仕方からは「スロープをつける方が良い」という回答以外は思いつきにくく、技術的な検討に偏りがちになることに思い至り、実践では結局使用しなかった。建築学関係の授業や、バリアフリーについて専門的に考える授業などでは、検討する意味があるだろう。

08. レストラン・ショップ [宗教の違い①]

イスラム教徒の来館者が増え、ハラルの食事を用意してほしいと言われたが、要望に応えることができそうにない。

A：ハラルの食事が出せないので、特別に弁当の持ち込みを許可する。

B：ハラルの食事が出せないので、来館時間などで工夫をしてほしいとお願いする。

ハラルとはイスラム法において合法的と判断される行為のことで、イスラム教徒が食べることを許されているものは原材料や加工方法などによって定められている⁷。近年では来日するイスラム教徒も増加しており、日本でもハラルフードを提供する店が増えている（写真5）。



写真5：京都市内でハラルの食事を提供するレストラン

日本のミュージアムが館内のレストランでハラル料理を提供するのは難しいのが現状だが、学生たちの間では、どうすれば多様な来館者を排除せずに済むかというアイデアが検討された。たと

例えば「ハラルの食事を扱う他のレストランを紹介する」「館のチケットを見せると近所のハラルレストランで値引きされる」「館内にフリースペースをつくり誰でも食事を持ち込み可にする」、などである。中には、「Uber Eats で頼めば良い」「はじめからハラル専門店にして、全員がハラルフードを食べれば良い」などのユニークな意見も出た。食事という誰にとっても身近な問題だったことから、ハラルについてはよく知らないとしても何らかの解決方法を考えようという意識が強い課題になった。

3.3 ビジュアル・コミュニケーション (項目09～11)

09. [案内サイン]

ミュージアムの洗練された空間を見に来たのに、案内をわかりやすくするための手書きの貼り紙だらけだった。

A：ミュージアムは弱視の人や高齢者などいろんな人がくるので、貼り紙を増やしてわかりやすくする方が良い。

B：貼り紙は、ミュージアムの建築やサインのデザインの統一感を損ねるので、するべきではない。

建築家やデザイナーによってデザインされた案内サインは、視覚的な統一感をもたらし、館のイメージをつくる。しかし、時にユーザビリティよりも見映えを優先したサインは、字が小さくて読みにくかったり必要な情報を読み取りにくかったりする場合がある。来館者からの質問が多い場所には館のスタッフが手書きの貼り紙を足して対応することもあるが、多数の貼り紙はかえって情報を混乱させるうえに、館の美観も損なわれる。

近年では、ミュージアムの建築の意匠から案内サインまで統一的にデザインする事例も増えている。この課題は、ミュージアム（とりわけ美術館）が館内の美観とユーザビリティのバランスをどう両立させるかについて考えることを意図していた。しかし、人文系や理工系の（美術・デザイン系でない）学生たちは、普段サインデザインに意識を向ける機会があまりないため、課題の意図が想定しづらかったようで、「そもそも、デザインの段階から見直すべき」というような、具体性に欠ける意見が一定数あった。「弱視や外国人にとっては、貼り紙が多くても分かりやすい方が良い」「貼り紙があると、おしゃれなミュージアムがおしゃれで無くなり、萎える。出入り口で案内サインのマークの説明をすればよい」というA・Bそのままの意見を述べる学生もいた。その他には、「貼り紙のデザインを空間デザインに合わせて変える」「かわりに音声で案内する」「お客さんにワークショップで考えてもらう」という意見も出された。授業内ですぐに解決のアイデアには思い至らなかったが、ビジュアル・コミュニケーションに目を向けてもらう機会にはなった。

10. [トイレのサイン]

女子トイレは赤でスカート姿、男子トイレは青でズボン姿、という従来のトイレマークを変更する案を公開したところ、市民から苦情が来た。

A：館がステレオタイプを乗り越えようとする姿勢を可視化したいので、変更する。

B：すでに慣習となっているため、変更すると混乱の恐れがある。

トイレマークについての補足

- ・日本では女子トイレ=赤、男子トイレ=青、の習慣があるが、海外には色分けの習慣はあまりない。
- ・近年では日本でも色分けを使わないトイレマークも増えている。

ここでは男女の別を表す色にフォーカスしている。性別を「青／赤」の色で区別することは日本では見慣れた表現だが、「男らしさ／女らしさ」のステレオタイプを助長するという批判もある。国・地域による慣習的な違いもあり、海外では「男性=青／女性=赤」の色分けを使用する例はあまり見られない。

Aの考えに賛成した学生が多く、「あくまで慣れの問題。ステレオタイプを払拭しようという流れは分かるし、次世代にも目を向けて、変更すべき。その流れを博物館が作っていくことも大事」「横に案内板を出し、意図を解説してアピールポイントにする」「トイレの横に『あなたの見方、ステレオタイプになってませんか』という看板をつける」「わかりにくいことが、かえって気づきになるのでは」等の意見が出た。中には、「いきなりは混乱するので、徐々に移行していく」「(青も赤も) 少しずつ白くしていく」「青・赤ではなく、黄色・緑とか」「市民投票する」「市民に新デザイン案を出してもらおう」等のアイデアも出た。更に、「トイレマークは便宜上のもので、言い出したらキリがない」「そもそも女=赤、男=青の何が駄目なのか。男と女の違いが誇張されると駄目なのか。何が問題なのか？ 形？ 色？ 男女差？」「トイレのマーク、色よりも形が問題だと思っていて、友人の男子はスカートをはくので、女=スカートというのも気に入らない」など、人々のジェンダー認識に関する根本的な問題提起もあった。



写真6：色ではなく記号の形で男女の別を示す例（ロンドン・パディントン駅）

11. [パンフレットのデジタル化]

館の会議で、館内パンフレットが増えすぎないように、デジタルメディアを使った案内に切り替えるべきだという意見が出た。

A：エコの観点から、極力紙をなくすべきだ。またデジタルなら多言語表記や文字の大きさ調整も容易だ。

B：デジタルデバイドを助長するため、紙はやめるべきではない。

スマートフォンの普及や Wi-Fi 環境の整備などを背景として、展示物の解説等のデジタル化が進んでいる。日本語と英語の解説だけでは十分内容を理解できない外国人観光客や、パネルの小さい文字を読みにくく感じる来館者にとっては、デジタルメディアを使った展示解説は有用である。また内容の更新が容易だという利点もある。一方、スマートフォンを持っていない来館者や、館内に設置されている電子案内板のようなデジタルデバイスを上手く操作できない来館者にとっては、すべての情報がデジタルデバイスに移行してしまうと不便になる可能性もある。

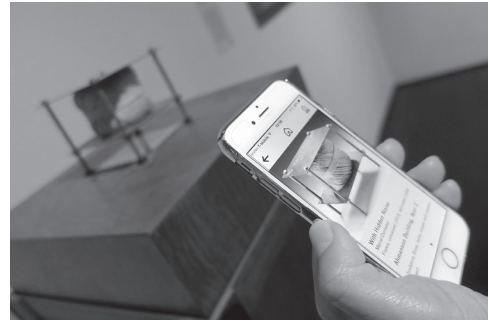


写真7：来館者がスマートフォンで展示の解説を見られる例（ロサンゼルス・カウンティ美術館）

学生の意見は、紙のパンフレットとデジタル併用が基本的な回答であったが、その比重や理由に対してはもろもろの意見が出た。デジタル化に消極的な意見としては「デジタルデバイドを助長する」「スマホを手放すことで、もっと日常から切り離されたい」「紙のパンフレットは持って帰って家でも楽しめる」「デジタル機器の操作は展示室には向かない」などが見られた。積極的な意見としては「簡単な操作ができるスマホを貸し出す」「デジタルは多言語化に有効」などがあった。その他、「紙資源を守るために、デジタルメディアを選んだ人には10円くらいキャッシュバックなどする」というアイデアも出された。実際、ミュージアムの館内に紙のパンフレットがあったら手に取るかを尋ねたところ、多くの学生が手に取ると答えたことからわかるとおり、紙かデジタルかという二元論ではなく、どのように使い分けるかと、その根拠（館の方針）を議論することに意味がある課題だといえよう。

3.4 展示（項目 12～18）

12. 展示の高さ [車椅子]

車椅子の来館者から、展示がほとんどみえなかったという苦情が来た。

A：車椅子の高さにあわせて全部低めの展示にするべきだ。

B：少数の人のために、多くの人がみづらくなるのはよくない。

2006年に国土交通省が施行したバリアフリー新法の後押しもあり、ミュージアムでも館内のスロープやエレベーター、多目的トイレ、身体障害者用の駐車場の設置など、車椅子利用者にも利用しやすい設備の整備が進められてきた。だが館内の展示物の高さを車椅子利用者の目線の高さに合わせると、他の来館者にとっては低すぎて見にくくなるため、誰にとっても見やすい高さの展示を目指すのは容易ではない。

学生からは「車椅子の方がみえないなら子供もみえないが、少数者にあわせるのは厳しいのでは」「車椅子が高くなる装置があればいい」「基本は何も変えず、説明文のみアプリか音声で

代用する」「作品の位置を低くする期間を設ける」といった意見が出た。「車椅子の人が通行するのは真ん中の通路で、健常者の鑑賞は一段下がった通路」といった、水族館で見られるような2層の展示を提案した学生もいた。

2020年度のノートルダム清心女子大学での実践では、この教材でワークショップをしたのちに、岡山市立オリエント美術館で実際に車椅子での鑑賞を体験した。写真8は、館内で車椅子を使って展示ケースを覗くとどのように見えるかを体験している様子だ。展示作品の前に置かれたキャプションパネルは十分読めるものの、足下の壁に車椅子に乗った自分の膝がぶつかるため展示物に近づきにくいことや、奥の壁の上方に掲示されたパネルを見上げると首に負担がかかることなど、普段は気づきにくい不便さについて大学生たちが発見する機会となった。



写真8：車椅子で展示をみることを体験する大学生（岡山市立オリエント美術館）

13. 解説パネル [多言語パネル]

当館の来館者は日本人の高齢者が多いが、外国人にも配慮して、表記を4カ国語対応にするという意見が出た。

A：少人数でも対応すべき。また、国に推奨されている対応をするほうが好感度が上がり、補助金も下りる。

B：4カ国語にすると字が小さくなるため、高齢の来館者には不親切だ。

この項目は内容が11. [パンフレットのデジタル化] と重なることもあり、実践では使用しなかった。ただし海外からの来館者が多いなど、館によっては切実な問題になっていることもあり得るため、課題自体は検討の必要があるテーマだと言える。

14. 展示の方法 [ハンズオン]

子供がハンズオンばかり触って実物をみていないことがわかった。

A：ハンズオンは、「開かれたミュージアム」にとって重要な展示手法だ。

B：ハンズオンは必ずしもミュージアムを開くわけではない。故障や汚れも目立ち、増やしすぎないほうが良い。

ハンズオン展示は、来館者の展示への理解を深めるために役立つ。たとえば写真9は、地図に凹凸があることで触覚で把握できたり、円筒状の棒を操作することで音声が出る仕掛けになっており、子供だけでなく、視覚障害者も楽しめるユニバーサルなデザインになっている。だがこの項目のBの考えにも書かれているとおり、ハンズオンは故障が多く、メンテナンスに費用や手間がかかる。また、ゲーム機のような感覚でハンズオンばかり触っていることで、せっかく実物が展示されていても興味を持たない子どもを増やすことも懸念される。

学生の意見としては、「学校じゃないから別にかまわない」「楽しい場所、もう1度行きたい

場所と思うことが大事で、学習にこだわらなくていい」「知的好奇心が刺激されるなら実物をみなくてもよい」など、ミュージアムでの楽しい体験を重視するものが多かった。中には、「展示物をみたあとハンズオンに触れる順序にする」「スタッフが軽く声がけをして促す」「作品をみないと解決できないハンズオンをつくる」など、ミュージアム関係者に近い視点から実物の重要性を説く意見もあった。



写真9：オーストラリア・ヴィクトリア州のアボリジナルの言語の多様性を、操作することで体感できるハンズオン（メルボルン博物館）

15. 展示の構成 [差別用語]

館が所蔵する資料に、現在では差別用語にあたる言葉や表現があった。しかし、資料としての価値は非常に高いため、展示するかどうか議論になった。

A：来館した人が不愉快になるので、避けるべきだ。

B：歴史なのだから問題ない。むしろそれを理由に重要な資料を館が出さないのは問題だ。

ミュージアムで扱う資料や作品の多くは、作成された当時の人々や社会の認識が反映されており、そこで使用されている表現や言葉のなかには、現在では差別にあたるとされるものを多く含んでいる。館がこれらの資料や作品を展示しようとするならば、それをどのように提示するのかについて、予め考えておく必要がある。近年、先住民の権利回復運動や Black Lives Matter 運動などを背景に、欧米圏のミュージアムでは、植民地主義的なコレクションや、植民主義的な認識の埋め込まれた展示解説や展示方法を脱植民地化しようとする動きがみられ⁸、こうした資料の取り扱いに関しては、これまで以上に慎重になっている。来館者にどのように提示するのかに加え、資料が属するソースコミュニティへの配慮も必要になっている。この課題では、差別用語を含む資料を展示するか否かの対立軸の先にある、誰のための・何のためのミュージアムか、という問いについて考えるためのものである。今後ミュージアムが多様な人々に向き合う際には、避けて通れない課題である。

この課題では、学生たちが熱心に議論する様子が印象的だった。ほとんどの学生が、「説明書きをしたうえで展示する」と答え、「差別があったという事実・歴史を知る必要がある」「後世の人達が反省すべき」「今の価値基準で展示するかしないかを定めるべきではない」「隠すこと自体がメッセージ性を生む」とさまざまな理由を述べた。「館がなぜそれを敢えて展示するのかを明示する」と、館の姿勢をより強く打ち出す方向のコメントも複数出た。中には「子供が覚えると使っちゃいそう」「部屋を分けて年齢制限をする」などのゾーニング案もあった。一方で、「当事者が嫌な思いをするのでは」「実際に差別された人々との対話が必須になると思った。私たちは差別された人たちの気持ちが理解できないため、えらそうに『歴史的価値があるため展示すべきだ』と主張するにはまだ早いかと思う」と、展示される側の人々の立場

に立つコメントも提示された。

16. 展示の構成 [芸術への表現規制]

美術館で、刺激の強い現代アート作品を、カーテンで仕切って展示した。子供への影響や宗教の違いに配慮してのことだったが、アーティストから表現の自由に対する規制だとクレームが来た。

A：ゾーニングによって来館者に選択肢を与えることは、表現の自由に対する規制や干渉にはあたらない。

B：仕切ること自体が先入観を与え、作品の見方を変えてしまうため、表現の自由に対する規制や干渉にあたる。

この課題では、芸術への表現規制の問題を考える。美術界では、市民のクレームや行政の介入によって展覧会で作品の撤去や規制が行われたり、展示拒否をするなどして、ミュージアムとアーティストが対立することは珍しくない⁹。ここでは作品（のある空間）をカーテンで仕切るという、他の作品とは異なる扱いをすることが、アーティストの表現活動や来館者が作品を鑑賞する権利に対する規制や干渉にあたるかどうかを考える。カーテンで作品を仕切ることの先には、作品を展示しないという選択肢があるため、来館者側が作品にアクセスする権利にも関わってくる。

学生たちは「アートはそもそも自由な表現（だから、これは表現規制だ）」と考える傾向にあったが、そこで終わらずに「アーティストに許可が取れなければ、仕切ることによって作品の新しい価値を出せないかをアーティストと相談・議論する」「一部だけカーテンで区切るのではなく、いっそすべての作品をカーテンで区切れば規制にならない」など、なんとかして表現規制にならない方法を模索する意見が出た。こうした解決への姿勢は、「ミュージアムのかたちを考えることはもちろん、ミュージアムで働く人たちの仕事だろうけど、アーティストに相談もなしでカーテンを取り付けたりするのはミュージアムが『ハコ』だけになってしまう気がしました。（略）しっかりとアーティストともつくりあげていくことがキュレーションは重要なのかなと考えています」というコメントに体现されており、ミュージアムの役割にまで踏み込んで考えた様子うかがえる。

ちなみに、ミュージアムという場所は、社会のタブーに挑んだり、日常では目に触れることのない人類の負の部分について展示する空間でもある。たとえば科学館であれば生物や臓器のホルマリン漬けが、また歴史博物館であれば、凄惨な史実が収められた写真等が展示されている。近年、こうした刺激の強いものを展示する場合には、予告パネルを提示するなどして、閲覧前に来館者に選択肢を与えることも増えてきた。しかし、この項目16では、アート作品の鑑賞という美術館特有の問題を扱っており、作品の見せ方自体が作品の表現や、来館者の鑑賞体験に影響を与えるため、それらとは区別して議論してほしい。

17. 展示の構成 [宗教の違い②]

イスラム教徒の来館者が増え、女性のヌードなど宗教上のタブーを考慮する必然に迫られた。

A：多様な人々への配慮の一環として、イスラム教徒にも配慮して作品を選定するべきだ。

B：特段の配慮は必要ない。

ルネッサンス以降、西洋美術の絵画や彫刻作品では多くの裸婦像が描写されてきた。そのため、美術館という空間は女性の裸の図像で溢れている。こうした状況は、ごく一部のフェミニスト達からの攻撃を除いて、芸術の名の下に不問に付されてきた。しかし、グローバリゼーションの中で、これまで以上に多様な人々がミュージアムという空間を訪れるようになり、西洋的な価値観や常識が通用しない場面が出てきた。とりわけイスラム圏では、女性の裸を露出することはタブーであり、またより厳密に言えば、そもそも人体を描くこと自体が偶像崇拜禁止というイスラム教の教えに反する。日本に暮らす多様な人種やエスニシティの人々が美術館を訪れる場合に、館としてはどのように考えるべきか、というのがこの項目の問いである。学生たちからは「ヌード作品があることを告知したうえで展示しても構わない」「すべての人が気持ちいい展示は難しいので、博物館の立場を明確に示す」「いろんな宗教があるので、キリがない。結果的に多様性を狭めるのでは」というように、Bに近い意見が大半を占めた。一方、「見たくない人のために、展示場所を仕切る」「宗教だけに限らず、子どもに見せたくない作品などのケースもあり得る」など、一定の配慮を是とする意見もあった。

多くの学生は、そもそも西洋美術における裸婦の位置づけや、イスラム教のタブーについての知識がないため、課題を出したときにある程度補足する必要がある。

18. 展示の構成 [思想]

展示内容が思想的に偏っていると来館者からクレームが来た。

A：ミュージアムの展示は常に中立であるべきだ。

B：館ごとに考えがはっきり示されているほうが多様で面白い。

ミュージアムが「中立」でないことは、近年しばしば指摘されるようになった。そもそも展示には伝えたいメッセージがあり、その背景にはイデオロギーや価値観がある。それらを曖昧にしたまま展示を行ってもメッセージは伝わらないが、一方で強いメッセージは異なる立場の意見をもつ人々を刺激する。こうしたミュージアムの思想性や立ち位置について学生たちに考えてもらうのがこの課題の主旨である。

抽象度が高い課題のため、我々の実践では、具体例をもとに議論してもらうことにした。まず、ディスカッションの前に、「思想的な偏り」と聞いてイメージするキーワードを学生たちにあげてもらった。「ジェンダー」「慰安婦」「歴史的タブー」「宗教」「政治」「原爆」「人種差別」等があがった。そのうえで、それぞれのキーワードがどのように思想的な偏りをもたらした

うるのかを尋ね、その後、それぞれが決めたテーマで、議論してもらった。（場合によっては、具体的なキーワードをいくつかこちらが提示しても良いかもしれない。）

学生の多くは、思想的な話をし慣れていない。そのため、他の項目と同じ発表・共有方法ではうまくいかず、学生が発表する中でファシリテーターと対話しながら、課題を整理していくような形になった。学生からは、中立性の難しさや可否、館の設置主体（公立か私立か）などに関して、様々な意見が出た。「ミュージアムは、一歩間違えれば来館者に対して、誤った認識や思想を与えかねないため、中立であることが理想であると考えられる。だが、広島平和記念資料館やベルリン・ユダヤ博物館といった特定の立場に立って作られたミュージアムは、批判があるごとに展示を変えると、そのミュージアムの趣旨が変わってしまう。こうしたことを踏まえると、中立的な立場をとることが絶対に正しいとは言えないと感じた」と、このワークショップでの議論や解説を経て考え方や視野に変化があったことを述べた学生もいた。

4. 実践の概要

上記の教材を使用して、大学の学芸員課程科目またはミュージアムに関する授業で4回の実践をおこなった。



写真10：授業での実践の様子（金沢大学）

(1) ノートルダム清心女子大学（岡山市）

- ・日時：2020年9月16日（水）10時45分～13時00分
- ・参加者：「博物館情報・メディア論」履修者22名（文学部及び人間生活学部所属）

- ・使用した項目：01, 02, 03, 04, 05, 08, 09, 10, 14, 15

- ・運用：各項とも、課題とA・Bの意見を紹介した後、まず二人一組のグループで1分間ディスカッションしてもらった。ディスカッションで出た意見を何グループかに発言してもらった後、教員からヒントや補足情報を示し、再びグループごとに2分間話し合う時間を設けた。その後、再びいくつかのグループに話し合いの結果を発表してもらい、フロア全体で議論した。なお、グループ内で意見が分かれた場合は、分かれた理由を説明してもらった。

(2) 金沢大学（金沢市）

- ・日時：2020年12月19日（土）13時00分～17時50分
- ・参加者：「博物館情報・メディア論」履修者30名（主として人文学類「考古学・文化資源学プログラム」所属）
- ・使用した項目：01, 02, 03, 05, 08, 10, 11, 14, 15
- ・運用：まず、課題のみを提示し、A・Bの意見をみせないまま、1分間話し合ってもらった。その後、何グループかから状況を聞き、そのうえでA・Bの意見を紹介しながら補足し、再

びグループごとに2分間話し合ってもらった。その後は再びフロアで共有した。途中で2回グループ替えを行い、複数の相手とディスカッションできるようにした。

(3) 京都芸術大学（京都市）

- ・日時：2020年12月25日（金）11時10分～12時30分
- ・参加者：「美術芸術論Ⅶ（美術館・博物館史（ミュージオロジー）」履修者14名（芸術学部アートプロデュース学科所属）
- ・使用した項目：06, 09, 10, 12, 13, 16
- ・運用：実践（2）に同じ。ただし、学生のディスカッションの時間を、前半2分+補足後に後半2分、という配分で実施した。企画当初は一问一答のようなスピードを想定していたため、実践（1）では解説を少なめにして沢山の課題をこなしたが、実践（2）（3）では、徐々にゆっくり学生たちと議論する方向に変わっていったため、設問の数は少なくなっていた。

(4) ノートルダム清心女子大学（岡山市）

- ・日時：2021年9月9日（木）13時30分～17時30分（※ Zoom を使用したオンライン授業）
- ・参加者：「博物館情報・メディア論」履修者10名（文学部及び人間生活学部所属）
- ・使用した項目：1, 2, 5, 17, 18
- ・運用：オンライン（Zoom）のため、前述とは異なる段取りで行った。課題を出し、グループ分けをしないまま1分考えてもらい、ランダムに発言してもらった（チャットに書きこんでもらうこともあった）。それらを共有しながら補足説明し、その後ブレイクアウトシステムをつかって、2人1組で3～5分話しあってもらった。オンラインでの話し合いは、対面よりも時間を要するためである。ブレイクアウト後、それぞれのチームに発表してもらった。Zoom で何度もブレイクアウトすると時間がかかるため、A・Bの意見はみせないこともあったが、それでも通常の3倍ほどの時間がかかった。

5. 学生たちの気づき（教材の意義と課題）

ここからは、教材の意義と課題を、学生たちのコメントを通してあきらかにする。既に各項目でもいくつか紹介してきたが、ここではワークショップ全体を振り返るコメントを、学生たちの気づきのポイントに分けて紹介する。

【公共性を考える】

- ・ワークショップ全体のテーマが「ミュージアムの公共性とは何か」だったのだが、すべての人が満足できる展示、どこを犠牲にして最大多数の利益をとる展示、全員が少しずつ我慢する展示、などいろいろな例を考え、結局うまい結論は出せなかった。（K大¹⁰）

- ・公共性、かべをなくし均一にするというイメージをもっていた。これは平均的なもののようなイメージだが、そうではないと思った。平均的にするのではなく平均的な存在から特異的なものまで、本講義でいう多様性を包括する。これが公共性なのだろう。ものの見方が変わった気がいたしました。公共性、多様性、対をなす問題のようで、同じようなことを指しているのかもしれないなど、感じました。（K大）
- ・このワークをやっていると、必ず最後はミュージアムは公共性をどこまで意識するべきかという話になりました。これはまだまだ答えが出ないし、むしろ答えが出た瞬間に、公共性が失われると思いました。（Z大）

多様な来館者について考えていくと、ミュージアムにおける公共性とは何かという問いに行き着く。上記のコメントからは、この教材の意図が、一部の学生には確実に伝わっていることがわかる。最後のコメントが興味深いのは、考え続けることでしか公共性は実現しえない、という本質にたどり着いていることである。

【現場を想像する】

- ・博物館スタッフとしてどのような部分をポリシーにしているかの状況設定次第で答えは幾つもあるということに気づかされ、「何のために・どうして」を常に考えて動くことの重要性を強く感じさせられました。（N大）
- ・今まで、あまり博物館学芸員の立場に立って物事を考えることがなかったので、とても良い機会になりました。多様な人々が存在する中で、博物館はどこまで出来るのかを考える際に、実際にそのような人々の立場にたって考えることも学芸員に求められる能力なのかなと感じました。（K大）
- ・このような問題を「世間的にこうだから」と避けていくのではなく、率先して変えていくのも、公共のものとしての博物館の重要な役割かなと感じた一方で、コストや社会的な問題もあって難しくも思いました。（K大）
- ・今回扱った問題は実際に現場で起こっていることばかりだったが、私たち学生は現場に出ていない分逆に思いがけない視点で多様なディスカッションができたと思う。現場に染まりきっていない人の意見は現場の悪い面を吸収していないため純粋でリアルすぎない。「そうは言っても無理」という社会に対するあきらめない姿勢がミュージアムを外側からよりよいものにしていくことにつながる。よって今回のように博物館を本業としない様々な

分野の人々が博物館について話すことは重要だったと考える。(K大)

学生たちは、自分が来館者の立場からしかミュージアムをみていなかったことに思い至ると同時に、初めてミュージアム側の視点に立ってみる事が出来たようだ。最後のコメントは、学生が自分たちの経験値のなさを自覚しつつも、だからこそ可能になる発想についても理解しているという点で、鋭い。

【自分を振り返る】

- ・自分自身が「ふつう」で常識的な人間だと思い込んでいたが、違う考えをもっている人も大勢いて、全て自分が正しいというわけではないということも思い知らされた。(K大)
- ・大体の問題は「丁寧に説明すれば分かってもらえる」という解決法を用いたが、実際のミュージアムでそれが通用するかは分からない。また、「子どもがうるさくても仕方ない」と今は思えるが、実際に美術館にうるさい子どもがいたらどう思うかは分からない。(N大)
- ・ミュージアムは学芸員がつくるものであると思い込んでいたが、私たち市民が考えなければいけない問題も多かった。「開かれたミュージアム」というのは、市民が利用しやすいということのもちろんであるが、ともに作り上げるという意味があると気がついた。(K大)
- ・自分は既存のものをあまり変えたくないと思えるタイプなので自分は頭が固いのだなと思った。周りの人が革新的な意見を沢山出して自分にはない発想が知れて興味深かった。またトイレの話や差別に関わる話など、博物館内だけに留まらない問題について考えて話し合うことができ、普段あまり気にしていないような社会の様々な問題について考えるきっかけにもなり、とても有意義な時間だったと感じた。(K大)

このワークショップの最大の意義は、このように学生たちが自分の思考について振り返り、他でもない自分がどのように博物館や社会と関われるのかについて考えてくれた点である。ミュージアムの空間は、学芸員だけがつくるものではなく、自分たちにも考えなければいけないことがある、という気づきは、ミュージアムにとっても非常に大きな意味を持つ。

【多様性の「課題」に気づく】

- ・それぞれ、1つの解決策を考えるのは難しいものばかりでした。この解答は、時代によっても違うものになると思います。(Z大)

- ・多様性を尊重するあまり少数派ばかりを優先しかねない問題も浮上した。（N大）
- ・トイレとかは大きく2つ（女・男）に分けられているけど、ジェンダーや思想って、実際には1人1人に答えがあると思います。どこまで妥協するか難しいし、多数決で決めてしまうのもなんだか違う気がするし・・・と考えれば考えるほどまとまらなくなってしまいました。全員が居心地のいい場所を作るためには、やっぱり少しずつ我慢や妥協が必要だな、と感じます。（N大）

多様性への対応と尊重は、いまや時代の要請としても無視できないだけでなく、開かれたミュージアムになるためには不可欠である。しかし、一方で、多様性の推進は、万能薬ではない。多様性という言葉にこだわり、誰のための・何のための取り組みかを忘れてしまうと、かえって窮屈になったり、思考停止をもたらすこともありうる。こうした多様性の「危うさ」は、【公共性を考える】で紹介したコメント「むしろ答えが出た瞬間に、公共性が失われる」と、本質的には同じである。そうした違和を一部の学生が敏感に感じていることもまた、多様性を考えるワークショップの成果といえよう。

【教材に対する指摘（教材の課題）】

- ・AさんBさんの間を取らせる誘導が少なからずあるように思った。間を取っているだけなら、ミュージアムはどこも同じようなニュートラルな存在になってゆくと思う。（Z大）
- ・障害のある人の保護や、ジェンダーフリー等、リベラル側の提起する問題が多いので、反リベラルな意見を言いにくい雰囲気は少なからずあると思いました。ワークショップ内では理想を語れますが、実現までの障壁等はみえてこないなので、実際には難しいことが多いのだらうと思いますが、このようなことを考えることには意義があると思いました。（K大）

上記2点は、この教材が抱える本質的な課題への指摘である。保守的な意見や硬直した習慣などを解きほぐしていくことがこのワークショップの根底にはあるが、必ずしも先進的な意見や改革を強要する意図はない。微妙な匙加減ひとつで学生が受ける印象は異なり、また完全にニュートラルな環境をつくることはできないが、学生が教員の意図を読み取って過剰に迎合しようとしてしまわないような場づくりには今後検討の余地が残されていると感じた。

6. 手順・運用について

最後に、ワークショップの手順や運用に関しても、学生たちのコメントを参考に振り返っておきたい。初回の実践後、ワークシートの項目によっては内容があまり限定されていないため「問われている内容がわかりにくかった」「前提条件がきちんと分かっている方が議論しやすい」という感想が複数あった。そこで、2回目からは、冒頭で、課題はあえて抽象度を高くしていること、したがって細かい状況などは自分たちで想定したうえで検討して良いことを伝えるよう心掛けた。その結果、「どういう状況で起こることなのか様々な想定ができる苦情や問題があったので、抽象的に書かれている面はよいと思った。意見を出す人がどんな想定でどんな状況を想像しているのかをきいたうえで意見をきくと、考えられる想定も視野も広がると思った」というコメントにみられるような、積極的な捉え方をしてくれた学生が多かった。設定も考えるためにはもう少し時間がほしいという声もあった。しかし、ミュージアムへの来館経験が少ないと、様々な状況を想定・想像すること自体が難しいことも浮き彫りになった。したがって、あまりに議論が膨らまない場合は、ファシリテーターが議論のための具体的な事例を提示することも必要である。

時間配分については、多くの学生がちょうどよいと答えた。ある程度スピード感を重視したため、間延びすることは避けられたようだ。しかし、時間が短いので、ペアを組んだパートナーとも違う認識で話している可能性があるという指摘もあった。「個人的に最初に自分の意見をもっとちゃんと持っておきたかった」と、ディスカッションに入る前に自分の意見を構築するための時間がほしかったという意見もあった。さらに、問いによっても異なる時間配分が必要かもしれない。たとえば項目15～18は、難易度が高いため、1分、2分という時間配分では足りないことがわかった。学生たちの様子をみながら長めにするなど臨機応変な対応が必要である。我々の実践でも、結果的には時間を大幅に延長して共有や解説を行った。

ディスカッションの人数については、「2人ペアでやると、大人数の時より濃い話し合いができてよかった」という意見があった一方、「4人くらいのグループワークがあったら更に多様な意見が聞けてよかったかもしれない」「2人だと意見が対立した場合に言いにくいと感じたので、3人で話し合うのでもよいと思った」など、人数を増やしてほしいという声も多くあった。2人1組にしたのは、意見を対等に出し合うことができる環境をつくるためだったが、2人の議論が行き詰まったときに突破口（第三者の意見）がないという難点がある。また、一対一で相手とは異なる意見をストレートに述べることに気後れや遠慮を感じる学生もいるようだ。ワークショップを運用する側は、そうした学生ができるだけ円滑にディスカッションに参加できるような場作りを工夫する必要がある。実践では幸い、ディスカッションでいろいろな人と意見交換をできたことの楽しさや意義を多くの学生が指摘してくれた。ペアを変えて行った回では、ペアが変わると新鮮でよかったという意見が多かった。

また、前後にファシリテーターが提示する解説や事例の豊富さは重要である。「ディスカッション前後の実例提示がわかりやすく良かった」というコメントからもわかるように、議論

するための素材や、学生たちが議論したあとに提示される事例が、課題の消化へとつながるからである。裏を返せば、ミュージアムへ行くことを日常的に行っていない学生たちを対象とする場合には、ファシリテーターによる補足や事例の提示なしでは、この実践は難しいといえよう。一方で、ファシリテーターが回答を誘導しすぎる危険もあり、難易度を予め設定しつつ現場での柔軟な調整も必要であることが分かった。

さいごに、先述したとおり、学生の経験値の少なさから、無難な答えに落ち着き、議論が深まらないような項目が出てきてしまうことも、このワークショップの課題といえる（たとえば04、06、09等）。したがって、理想を言えば、ミュージアムの関係者（学芸員）と学生とがペアになってこのワークショップに取り組むような実践ができれば、双方にとって意義深い経験となるのではないだろうか。

7. おわりに

多様な人々を受け入れる、というのは一見簡単なようでいて、困難を伴う。どのような状況にも適用可能なユニバーサルなデザインは究極的には存在しないため、それぞれの館がミッションや予算、制限などを考慮しながら何かを優先し、何かを切り捨てていくしかない。しかし、その選択の過程や、そこに至る思考そのものが、多様性への意識を醸成していくのではないだろうか。

学生たちが議論の過程で、様々なことに気がつきながら、ディスカッションすることの楽しさを実感してくれたことが、このようなワークショップ形式で考えることの最大の意義だと感じた。本稿の冒頭で述べたように、この研究の目的は、各ミュージアムがどのように多様性に向けた取り組みをしているのかを、ミュージアムの組織、運用、ファシリティなど複数の側面から総合的に考えられる手立てを模索することであったが、その目的をある程度達成できているといえよう。同時に、教材が抱える課題についても、今後の実践するなかで少しずつ調整していきたい。

注

- 1 この実践では、美術館・歴史（民族）系博物館・自然史系博物館・理工系博物館・郷土博物館・動物園・水族館・植物園などの社会教育施設の総称として用いる。
- 2 学芸員科目「博物館情報・メディア論」で使用するツールとして考案したものだが、他の授業やミュージアム等のワークショップでも活用できるものになっている。「博物館情報・メディア論」は、ミュージアムの情報やアクセスの在り方について考える科目であり、学生たちは、この教材を通して、誰のための・何のための情報かを主体的に考えることができる。
- 3 詳細は本稿「4.」を参照。

- 4 科学研究費助成事業「多文化共生時代のミュージアムを分析する方法の開発及びその理論化」
- 5 各項目で示す学生のコメントは、教員側が授業中につけていた記録と、学生たちのワークシートのメモから起こした。そのため、一言一句学生の発言通りでないこともある。
- 6 国立民族学博物館の広瀬浩二郎氏の取り組みが有名だが、他にも兵庫県立美術館、京都国立近代美術館、岡山県立美術館、東京都写真美術館など主に美術館を中心に多くの取り組みがある。
- 7 ハラルの解説は、次のウェブサイトなどを参照した。特定非営利活動法人 日本ハラール協会「ハラールとは」<https://jhalal.com/halal>、独立行政法人 日本貿易振興機構「ハラールとハラール認証について」<https://www.maff.go.jp/kinki/seisan/nousan/yusyutu/pdf/jetro.pdf>（ともに2021年9月8日最終閲覧）
- 8 村田麻里子「ミュージアムの展示における脱植民地化——『コロニアル・テクノロジー』を脱構築する手法の検討」『関西大学社会学部紀要』53(1) 2021、pp.141~167
- 9 たとえば、『美術手帖』の特集〈表現の自由と規制の事件簿〉2020年4月号、pp.88~99を参照。
- 10 N大=ノートルダム清心女子大学、Z大=京都芸術大学（前京都造形芸術大学）、K大=金沢大学。

※本稿は、JSPS 科研費 JP18K01105（「多文化共生時代のミュージアムを分析する方法の開発及びその理論化」代表：村田麻里子）の成果の一部である。